

人は他者の協力行動に同調するのか？

○ 藁田みな美¹・井横田晋大²・中西大輔²

(¹ 広島修道大学大学院人文科学研究科・² 広島修道大学健康科学部)

目的

人は集団状況になると多数派の行動を模倣する傾向にあり (Asch, 1956), 集団で相互協力が求められる場面でも同様の傾向が示されてきた (e.g., Liebrand et al., 1986)。しかし多くの研究では, 多数派に対してどのくらい同調しやすいのかが検証されていない。そこで本研究では, 協力場面における多数派同調バイアスに注目する。

多数派同調バイアスとは, 集団内の多数派の行動に対して極端に模倣する傾向である (Boyd & Richerson, 1985)。多数派へのバイアスの程度は, 比例的なもの (e.g., 60%の人々が協力していた場合に 60%の確率で協力する) から, バイアスの強いもの (e.g., 60%の人々が協力していた場合に 100%の確率で協力する) まで連続的に存在し, バイアスが強いほど皆が同じ行動を取りやすくなる。このバイアスがあることで協力的な集団形成を促進できることが論じられているが (文化的群淘汰理論: Boyd & Richerson, 2005), 実際に人々が多数派同調バイアスを示すのかは明らかでない。そこで本研究では, 集団での協力場面 (社会的ジレンマ状況) を用いて実証的に検証する。

方法

参加者 一般人 159 名 (女性 83 名, 男性 76 名, $M_{age} = 40.45$ 歳, $SD = 9.13$) を分析対象とした。

場面想定法実験 参加者は, 社会的ジレンマ状況を満たす 14 個のシナリオ (e.g., 募金活動が行われている状況) を読み, それぞれのシナリオで協力するか否かに回答した。その後, 集団内の他者の行動情報が 4 パタン (i.e., 集団の協力率が 0%, 33.3%, 66.7%, 100%) 提示され, それぞれの場合に協力するか否かに回答した。

結果

4 パタンの各協力率をプロットした (Figure 1)。バイアスが見られる場合は S 字の曲線が描かれると期待されるが, 結果は比例的な線が描かれた。

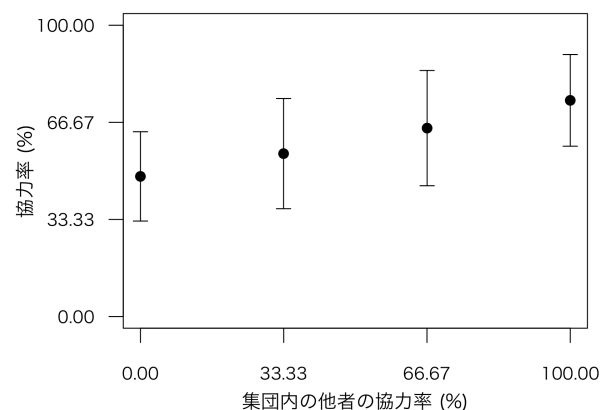
D^* (多数派同調バイアスの程度) を算出し, ブートストラップ法 (100 万回) を用いて多数派同調バイアスが観察されたかどうかを検証した。 D^* が正の値であれば多数派同調バイアスが, 0 であ

れば比例的な同調が観察されたとと言える。分析の結果, 全てのシナリオにおいて 95%信頼区間には 0 が含まれていた (95%CI = [-0.61, 0.83]) ことから, D^* は 0 から差があるとは言えなかった。

本研究で得られたデータ (Figure 1) が, 1 次式から 3 次式のうち, どのモデルで最も当てはまり良いかを検証した。その結果, 直線を表す 1 次式が最も当てはまりが良かった (1 次式: AIC = -34.11, 2 次式: AIC = -32.14, 3 次式: AIC = -32.49)。

Figure 1

4 パタンにおける各協力率 (エラーバーは 14 個のシナリオの標準偏差を示す)



考察

本研究の結果, 協力場面で多数派同調バイアスは観察されなかった。文化的群淘汰理論 (Boyd & Richerson, 2005) では, 正しい情報を見極める領域で見られる多数派同調バイアスが協力の領域でも見られることを前提としているが, 本研究の結果はこの見解に疑問を投げかけるものだった。本研究の限界点として, 日常場面を描いたシナリオを用いたため, 多数の交絡要因が混在していた可能性がある。そのため, 実験室実験を用いた統制が必要だろう。また, 本研究では単一の集団状況を想定していたが, 別の集団状況 (e.g., 集団間で競争する状況) を用いても同様の結果が得られるのかを検討する必要がある。

謝辞

データ解析を行う際, 徳岡大先生 (人間環境大学) から有益なコメントを頂きました。ここに記して感謝申し上げます。